



展覧会

ナラティブの修復

せんだいメディアテーク開館 20 周年展
Restorations of Narrative

2021 年 11 月 3 日(水・祝)～2022 年 1 月 9 日(日)

せんだいメディアテーク 6 階ギャラリー 4200

展覧会名	ナラティブの修復
会期	2021 年 11 月 3 日(水・祝)～2022 年 1 月 9 日(日)
休館日	11 月 25 日(木)は休館、12 月 28 日(火)から 1 月 3 日(月)は年末年始休館 *新型コロナウイルス感染症防止などの観点から、本展の予定や内容に変更が生じることがあります。 その場合は当館のウェブサイトを通じて随時お知らせいたします。
公開時間	10:00～19:00
会場	せんだいメディアテーク 6 階ギャラリー 4200
入場料	一般 500 円(大学生・専門学校生含む)、高校生以下無料 障がい者手帳・豊齢カード等をお持ちの方は半額
主催	せんだいメディアテーク(公益財団法人 仙台市市民文化事業団)
助成	一般財団法人 地域創造、芸術文化振興基金
後援	NHK 仙台放送局、tbc 東北放送、仙台放送、ミヤギテレビ、KHB 東日本放送、河北新報社、朝日新聞仙台総局、読売新聞東北総局、毎日新聞仙台支局、産経新聞東北総局、日本経済新聞社仙台支局、仙台リビング新聞社、せんだいタウン情報 S-style、エフエム仙台、ラジオ 3 FM76.2
協力	和光大学芸術学科松枝研究室
展覧会ウェブページ	https://www.smt.jp/projects/narrative/

本資料についてのお問合せ

せんだいメディアテーク 企画・活動支援室 企画事業係 担当 学芸員 清水建人
〒980-0821 仙台市青葉区春日町 2-1 TEL 022-713-4483 / FAX 022-713-4482
<https://www.smt.jp/> E-mail: office@smt.city.sendai.jp

展覧会概要

開館 20 年を迎えたせんだいメディアテークでは、ナラティブ(もの語り)をテーマとした展覧会を開催します。古くは民話に例をみるナラティブの様態ですが、今日わたしたちがアートと呼ぶ表現もその一形態として捉えることができるでしょう。それは個々の出来事や体験を他者へと開いていくさまざまな「語りの術」であると言えます。

この展覧会には、東日本大震災からの 10 年間、メディアテークとともに地域のなかで活動してきた表現者が、過去・現在・未来を見据えて、それぞれの観点であらわした 10 のナラティブが集います。

情報技術の発達とともにコミュニケーションは遠隔化し、ナラティブをとりまく環境は大きく変化してきました。そして、わたしたちはいま、新型コロナウイルスの流行によって、他者との空間の共有や、身体的な接触が困難になるという危機にあります。そのなかで、もちろんインターネットは有効な技術ですが、メディアテークではそれだけに頼らず、独自のメディアや技法の開発によって生まれる多様なナラティブを伝え、次の 10 年に向けて、一元的ではない世界の認識を提示したいと考えています。

アーティストプロフィール

阿部 明子 あべ・あきこ

1984 年宮城県美里町生まれ。2007 年東北芸術工科大学デザイン工学部情報デザイン学科映像コース卒業。写真家。日常的な風景と自身の生活空間を編み込むようにしながら、画面内に異なる時空を複層させる写真表現をおこなう。近年の主な展覧会「阿部明子・是恒さくら展『闘 - いき - を編む』」(塩竈市杉村惇美術館、2019 年)。2017 年宮城県芸術選奨新人賞受賞。



参考過去作品 《レウムノビレ》(2017 年)

磯崎 未菜 いそざき・みな

1992 年東京都生まれ。2019 年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。特定の土地に根づく童謡や労働歌などを手がかりにしながら、場所に添う新たな“うた”を作る「小民謡プロジェクト」を軸として、主に映像を用いた作品制作をおこなう。現在は仙台市を拠点に、「一般社団法人 NOOK」のメンバーとしても活動する。近年の主な個展「singing forever 高砂」(秋田公立美術大学ギャラリー BIYONG POINT、2019 年)。



参考過去作品 《広場のうた #稲城場所》(2018 年)

アーティストプロフィール

菊池 聡太郎 きくち・そうたろう

1993年岩手県生まれ。2019年東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻修了。主に風景を主題としたドローイングと建築素材を用いたインスタレーション作品を発表する。他に空間設計や什器設計 / 制作を共同でおこなうユニット「建築ダウナーズ」、宮城県を拠点に編集やキュレーションなどを協同でおこなうアーティストグループ「PUMPQUAKES」としても活動する。近年の主な個展「喫茶荒地」(Gallery TURNAROUND、2019年)。



参考過去作品 《燃えた山》(2019年)

工藤 夏海 くどう・なつみ

1970年宮城県南三陸町生まれ。絵画、立体、版画、人形と様々な方法で表現をおこなう。2015年頃から小さな布の人形を用いてテーブル上で「まちがい劇場」と称した人形劇未経験者との即興人形劇を始める。人形劇がこころの拠り所となるよう活動を続けながら技法の探究をしている。他に仙台のバンド「yumbo」のメンバーとしても活動する。近年の主な個展「世の中グラデーション」(Gallery TURNAROUND、2017年)。



参考過去作品 《a-u-o》(2015年)

小森 はるか+瀬尾 夏美 こもり・はるか+せお・なつみ

映像作家の小森と画家・作家の瀬尾によるアートユニット。2011年3月に、ともに東北沿岸へボランティアに行ったことをきっかけに活動を開始する。2012年より3年間、陸前高田市に暮らしながら制作に取り組む。2015年には、土地と協働しながら記録をつくる組織「一般社団法人 NOOK」を設立し仙台市に拠点を移す。現在は陸前高田、仙台、東京などで、風景と人びとのことばの記録を軸に制作と発表を続けながら、対話の場づくりなどもおこなっている。



参考過去作品 《見える世界がちいさくなった コロナ対話の広場》(2020年)

アーティストプロフィール

是恒 さくら これつね・さくら

1986年広島県生まれ。2010年アラスカ大学フェアバンクス校卒業。2017年東北芸術工科大学大学院修士課程地域デザイン研究領域修了。日本の東北地方や北米各地の捕鯨、漁労、海の民俗文化を尋ね、リトルプレスや刺繍、造形作品として発表する。リトルプレス『ありふれたくじら』主宰(Vol.1～6既刊)。近年の主な個展「N.E. blood 21: Vol.67 是恒さくら展」(リアス・アーク美術館、2018年)。



参考過去作品 《ありふれたくじらジャーナル：牡鹿半島～太地浦》(2017年)

佐々 瞬 ささ・しゅん

1986年宮城県生まれ。2009年東京造形大学美術学科絵画専攻卒業。身体的な実践によって、過去の出来事を現在のなかに捉えなおすことで、個人や共同体の失われた関係性の再構築をはかる。東日本大震災後は、半壊した宮城県沿岸部・新浜の住宅を借り受け、アーティストや建築家を招聘するプライベートなレジデンスプログラムなども企画する。近年の主な個展「公園 / ローカルの流儀」(Gallery TURNAROUND、2021年)。



参考過去作品 《〇〇のためのサバイバル》(2009年)

佐藤 徳政 さとう・とくまさ

1981年岩手県生まれ。東京でデザインや住宅設計の仕事に携わっていたが、震災を機に帰郷し、共鳴する仲間達と日常を豊かにしていくためのクリエイティブ集団「FIVED」を主宰する。震災で途絶えた地域の七夕祭りの復活や、神楽を創作する活動のほか、嵩上げ工事で埋められる巨石「五本松」の記録をおこなってきた。近年の主な展覧会「巨石装置『五本松』展～陸前高田森の前地区からの表出」(せんだいメディアテーク、2016年)



参考 「五本松神楽のイメージ」

アーティストプロフィール

伊達 伸明 だて・のぶあき

1964年兵庫県生まれ。1991年京都市立芸術大学美術学部大学院工芸科修了。2000年より「建築物ウクレレ化保存計画」を始め、現在までに寺院、学校、一般住宅など約80物件の建物をウクレレ化している。各地での個展開催の他、地域資源再発掘型の企画構成にも関わる。仙台では2012年から「亜炭香古学」を監修し、2015年に展覧会「山のひかり川のほし」(せんだいメディアテーク)を開催。2017年からは「しらべの細道シリーズ」(東北リサーチとアートセンター)を監修。著書に『建築物ウクレレ化保存計画 2000.4～2004.3』(青幻舎、2004年)。



参考過去作品 《桃林堂ウクレレ》(2020年) 撮影：表恒匡

ダダカン連 ダダカンレン

仙台在住の糸井貫二(ダダカン)氏に惚れこんだ有志一同。メンバーは、美術・メディア研究者の細谷修平、元・美術館学芸員の三上満良、ギャラリー主宰の関本欣哉、アーティストの中西レモン。細谷と中西は2008年より糸井宅を訪れるようになり、関係者を含めたインタビューと映像記録に取り組む。三上は2009年に「前衛のみやぎ—昭和期芸術の変革に挑んだ表現者たち」(宮城県美術館)を企画、戦後前衛美術の文脈で調査・研究し、郷土の表現者として糸井氏を取り上げた。関本は「2012・仙台アンデパンダン展」を皮切りに糸井氏との交流を続け、現在進行形の糸井氏の生活と表現に目を向けている。



ダダカンこと糸井貫二氏 鬼放舎にて(2008年)

展覧会の特徴

▶ 東日本大震災以降、メディアテークとともに活動してきた仙台・宮城ゆかりのアーティストたちが開く 10 の語りの技

本展の参加作家は、東日本大震災以降にせんだいメディアテークとさまざまに協働してきた作家たちです。

阿部明子は、写真を用いて、過去の視覚的な記憶の空間と、自分の現在の生活空間の様相を重ね合わせ、時間が複層したようなイメージをあらわしています。2017年に宮城県芸術選奨新人賞を受賞しました。今回は、他界した父の子供の頃のアルバムをもとに、父が見たであろう景色と、現在の風景を重ね合わせることで、記憶の場所としての家のイメージを構成します。



参考過去作品 《レウムノビレ》(2017年)



本展の展示プラン

磯崎未菜は、住民との交流や、土地の慣習などをもとに場所に添う新たな歌を作る「小民謡プロジェクト」をおこなってきました。それらは、わらべ唄のように、身体を使ったユニークな遊びの映像とともにあらわされます。これまで多摩ニュータウンや、震災後の福島、仙台の蒲生などの歌を作ってきました。2018年からは仙台を拠点として制作をおこなっています。今回は、近代以降の民謡や童謡について考察しつつ、コロナ禍における新たな歌をあらわします。



参考過去作品 《The Dreamtime》(2020年)

展覧会の特徴

▶ 東日本大震災以降、メディアテークとともに活動してきた仙台・宮城ゆかりのアーティストたちが開く 10 の語りの技

菊池聡太郎は、東北大学で建築を学び、これまで建築的な主題に基づいた空間構成を、風景のドローイングと組み合わせて発表してきました。今回は、その活動のなかで、彼の近年の主題となった「荒地」について、ドローイングを中心にあらわします。心象でありながら、現実の風景でもあるそれらのドローイングをとおして、荒地についてのいくつかの思索を生む空間を構成します。



参考過去作品 《鹿探し》(2017年)



本展の展示プラン

工藤夏海は、仙台に暮らしながら、2017年から、小さな手作りの人形を用いた即興人形劇「まちがい劇場」をはじめます。まちがい劇場は、見るよりも参加することを主眼においた人形劇です。彼女は、人形を介する事で可能になる対話の魅力を探究し、人形劇が人に及ぼす影響について考え続けています。今回はこれまでに制作したいくつもの人形たちを集わせて物語を構成するとともに、それらを用いた即興人形劇などをおこないます。



参考過去作品 《MAYOKE》(2015年)



参考 まちがい劇場の様子

展覧会の特徴

▶ 東日本大震災以降、メディアテークとともに活動してきた仙台・宮城ゆかりのアーティストたちが開く 10 の語りの技

小森はるかとは瀬尾夏美は、東日本大震災以降に陸前高田に移住し、被災した土地と人に寄り添い記録する活動を続けてきました。その成果は、映像作家の小森と、画家で文筆家の瀬尾が、それぞれの表現技術を活かして、展示や上映、書籍によってあらわしてきました。今回は、震災に関するこれまでの多数の聞き取りのなかで気付かされた、11歳という時期の人生に与える大きな影響力に着目し、幅広い年齢層の11歳の記憶をたずねます。いくつもの語りのなかで、個人史であると同時に、地域や日本社会の生きた年代記を浮かび上がらせようとする、彼女たちの新たな試みを発表します。



参考過去作品 《みえる世界がちいさくなった》(2019-2021年)



参考過去作品 《二重のまち／交代地のうたを編む》(2019年)

(「日常のあらい」展示風景、金沢21世紀美術館、2021年、撮影：来田猛)

是恒さくらは、北米や東北の捕鯨や漁労など海の民俗文化を調査し、刺繍作品や小冊子のかたちで発表してきました。今回は、2015年から山形と仙台に暮らしながら、東北各地で聞き取ってきた鯨にまつわるいくつもの物語の紹介とともに、鯨の死後、海底でその巨体によって形成される「鯨骨生物群集」に着目し、生命の継承と物語の継承がイメージとして融合していく空間の構成をおこないます。



本展の展示プラン

参考過去作品 原画刺繍「ありふれたくじら Vol.1 網地島／鮎川浜」(部分)(2016年)撮影：根岸功

展覧会の特徴

▶ 東日本大震災以降、メディアテークとともに活動してきた仙台・宮城ゆかりのアーティストたちが開く 10 の語りの技

佐々瞬は、仙台に住まいながら各地で精力的に制作発表を続けています。東日本大震災以降は、被災した仙台の新浜にある住宅を借り受け、アーティストや建築家が滞在できる場所を設けるなどの活動もおこなってきました。地域社会や共同体のあり方に焦点を当てる彼は、今回、まもなく生まれ変わろうとしている仙台の追廻地区の街の記憶を伝え保存するための、資料館のプランを展示します。

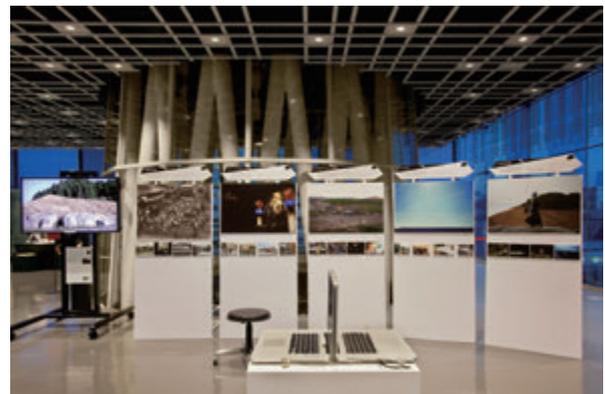


参考過去作品 《旗の行方》(2015年)

佐藤徳政は、東日本大震災を機に帰郷。被災した街の復興工事のなかで、途絶えた祭りの復活に尽力し、失われていく文化的な遺産の記録活動や、神楽を創作するなどユニークな活動をおこなってきました。またメディアテークの「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」の活動に参加し成果を展示発表してきました。今回は、未来へ伝えたい想いを詰め込んで創作した寓話をもとに、架空のオリジナルショップを展開します。



参考 「超絶祭 Vol.2 巨石龍」より

参考 「巨石装置「五本松」展～陸前高田森の前地区からの表出」
展示風景 (2016年)

展覧会の特徴

▶ 東日本大震災以降、メディアテークとともに活動してきた仙台・宮城ゆかりのアーティストたちが開く 10 の語りの技

伊達伸明は、これまで仙台や宮城の「亜炭」や「埋もれ木」の調査やワークショップをおこない、その成果をメディアテークにて展示発表してきました。今回は彼が2000年から継続している「建物ウクレレ化保存計画」で制作された16個のウクレレを展示します。これは、取り壊される建物の部材の一部でウクレレを制作し、失われる建物の面影を楽器として残すというユニークな試みです。宮城では初めての公開となります。



参考 芦屋市美術博物館での展示風景（2013年） 撮影：表恒匡



参考過去作品 《桃林堂ウクレレ》(2020年) 撮影：表恒匡

ダダカン連は、仙台在住の表現者である糸井貫二氏（ダダカン）の活動を記録・保存し、紹介していく有志のグループで、美術やメディアの研究者である細谷修平、元美術館学芸員の三上満良、ギャラリートーンアラウンド主宰の関本欣哉、アーティストの中西レモンによって構成されています。糸井氏は、宮城だけでなく戦後の日本の美術史のなかでもハプニングやメールアートなどその前衛的な活動によって近年になり注視されています。今回は、これまでの糸井氏との交流から得られた資料とともに、彼の活動の遍歴を紹介します。

糸井貫二（ダダカン） 1920年東京生まれ。10歳の頃に叔父からダダイズムの話聞き興味をもつ。戦時中は徴用により筑豊で坑内採炭に従事。1945年、熊本特車部隊に入隊し、鹿児島で終戦を迎える。中学時代から器械体操部に所属し、戦後の第1回国民体育大会に出場。その後九州の炭鉱や東京の倉庫会社に作業員として勤務しながら独学で作品を制作し、1951年に銀座フォルムで初個展を開催。同年の第3回読売アンデパンダン展に《たまご》（彫刻）を出品。1952年に両親が住む仙台に移住するが、54年には東京都大森に転居。以後、仙台と東京、父母の故郷である大分県を拠点として活動する。1958年、第10回読売アンデパンダン展に出品。以後同展には最後の15回展まで毎回出品（ただし14回展は作品が撤去される）。1960年代に入ってから、造形作品だけでなく、行為としての芸術「ハプニング」（パフォーマンス）を各地の前衛芸術家たちと展開、その名を“ダダカン”として知られるようになる。1963年に仙台に戻り、同年日立ファミリーセンターで個展。1964年仙台アンデパンダン展に出品。同年東京オリンピックの聖火があまりにも美しかったため、「聖火体现」として聖火より早く銀座を全裸独走。1967年仙台の野外展「西公園アートフェスティバル」に参加。この頃、仙台市内のコニシリビング、フジヤ画廊などの展覧会場や市役所前広場、 Donto 祭、一番町歩行者天国など各所でハプニングをおこなう。1970年4月、「太陽の塔」を占拠した男の新聞記事を読み、彼を激励するため大阪万博に向かい、万博会場を全裸で15メートル疾走。その後、母の介護のために仙台を離れるが、1979年に仙台に戻り、1980年代以降は自宅「鬼放舎」を拠点に表現活動を続ける。

カタログ

展覧会記録書籍：『ナラティブの修復』

本展の写真記録とあわせ、識者による寄稿や作家の座談会記録などで構成。
2022年3月発行予定。左右社より発売。A5版変形。200頁相当。
ブックデザイン：有佐祐樹